ＳＡＳＡ（福井県学力調査）の活用方策
－「活用力問題」を中心に－

佐々木克己　　福嶋洋之

福井県学力調査は1951年（昭和26年）に始まり、今年度は第62次の実施となっている。全国的に見ると、都道府県単位の児童・生徒を対象とする大規模な学力調査は、昭和の時代には1県が昭和47年に開始しているのみで、他は平成に入ってからの実施である。そして本県が長年にわたって児童・生徒の学力の実態を把握し指導改善に役立ててきたことの成果は、全国学力・学習状況調査における安定した好成績によって証明されていると考えられる。なお、2011年度の第59次調査より「SASA」の名称を用いている。これは「Student Academic Skills Assessment」の略である。

かつての福井県学力調査は各教科における基礎的・基本的な知識の定着度や理解度を調査することが主たる目的であったが、現在では、2007年に始まった全国学力・学習状況調査において「活用」としてのＢ問題が出題されている（Ａ問題は「知識」）ことに合わせて、SASAにおいても「活用力問題」による本県児童・生徒の学力（「活用力」）の検証も行っている。

人が実社会で直面する問題の多くには「正解」がない。重要な問題であればある程そうである。そして変化の激しい現代社会では、学校教育においても、基礎的・基本的な知識や技能をもとにして、自らの頭で主体的に考え、「最適解」を見出していく力を養うことが社会の側からも求められている。

本稿では、近年とみに重要視されている児童・生徒の「活用力」を育成するために、SASAにおいて出題されている「活用力問題」を、授業改善と学力向上により生かしていくための方策を中心に考察する。

＜キーワード＞　生きる力、全国学力・学習状況調査の「活用」問題、学力向上、授業改善

Ⅰ　主題設定の理由

2012年に実施された経済協力開発機構（OECD）の学習到達度調査(PISA)で、日本は12年ぶりにトップクラスに返り咲いた。これは日本の子どもたちの弱点は「知識の活用力」であるという課題が全国的に共有され、各学校の授業において「活用力」を伸ばすための授業改善が行われ、入試問題等でも「活用力」を試す問題が増えてきたことの成果であると考えられる。

また、2013年10月31日に自民党教育再生実行会議より大学入試制度改革の提言が公表された。その趣旨は、一発勝負のペーパーテストの得点で大学入学者の選抜を行うのではなく、高校までの主体的な学習の履歴や、大学で学ぶことへの目的意識等を、面接や小論文等の多面的な評価方法により「総合的」に評価していくということである。

新しい時代に即した教育の実現のために、SASAの「活用力問題」に含まれているメッセージを、現場における指導改善に役立てていく方策を追究したいと考えた。

Ⅱ　研究の目標

SASAで全教科において出題されている「活用力問題」を、各学校における平素の授業の質の向上、家庭学習課題の改善、各教員が作成する試験問題の改善につなげ、本県児童・生徒の更なる学力向上を実現する。

Ⅲ　2013年度SASAの概要

１　調査の目的

県内の児童・生徒の学習状況および学習と生活に関する意識や実態を把握するとともに、調査結果を分析

することにより学習指導上の課題を明らかにし、学力向上に資すること。

２　教科、対象学年

小学校第５学年……国語、社会、算数、理科、学習や生活に関する調査

中学校第２学年……国語、社会、数学、理科、英語、学習や生活に関する調査

＊公立小・中学校では全校において全員実施。国私立小・中学校は希望する学校において実施

３　出題について

・全教科において「活用力問題」を出題

国語、算数／数学においては、活用力問題作成に関して豊富な経験と高い見識を有する大学の先生にアドバイザーを委嘱し、講演会と問題検討会を実施

・経年変化をとらえるために過去の福井県学力調査と同一問題を出題

（国語・算数/数学は２題、社会、理科、英語は４題）

・過去の全国学力・学習状況調査で本県の課題となっている分野から出題

４　実施時期

平成 25 年 12 月 13 日（金）～12 月 20 日（金）

各学校が、同期間内に、期日、校時などを決定して実施

５　年間のスケジュール

３月　基本計画作成

５月　問題作成会議開催

10 月　調査問題、成績処理プログラム完成

12 月　問題送付、各校で調査実施（自校採点）

１月　データ回収、データ処理、分析

→重要課題と考えられる問題について作成した課題克服教材集を各学校で活用

２月　速報、各校の成績資料送付

→各学校が自校児童・生徒の学力の実態を把握し、指導改善の方策を検討

３月　報告書完成、福井県教育研究所 HP で公表

→調査結果の分析をもとに作成した指導例を各学校で活用

→各学校において学力向上プランを作成

Ⅳ　本年度の「活用力問題」についての考察

１　「活用力問題」例

(1) 中学国語

国語の授業で、「月と古典文学」というテーマで、グループにより調べたことを発表する、という状況を設定する。

設問（1）

阿倍仲麻呂の歌「天の原ふりさけみれば春日なる　三笠の山に出でし月かも」と李白の漢詩「静夜思」を提示し、この二つの作品の共通点を取り上げ、それについて感じたことや考えたことを述べるための発表原稿を作成する。

設問（3）

発表のための提示資料の内一つを空白にして、「竹取物語の一節」、「月の呼び名の解説」、小林一茶の俳句「名月を　とつてくれろと　泣く子かな」の３つを候補として提示し、自分ならば３つの資料のうちどれを選択するかを決めて、その理由を書く。

実際の授業での場面を例にとり、与えられた資料をもとにして思考し、判断し、そして表現することを求めている。

設問（1）では、まず２つの作品にこめられている作者の思いを正確に受け止めることが必要である。そして、理解したことから出発して他者に伝わるように自らの「感じたことや考えたこと」を言葉で表現できて、はじめて問いに対する答えとなる。

設問(3)では、授業における言語活動において、情報を取捨選択し自分たちにとっての最適解を見つけ出し、その理由を説明することを求めている。どの資料を選ぶべきかには、もちろん「正解」はない。自分ならば発表全体の中で、どの資料を選べば最も内容のある発表にしていけるかという視点から考え選択し、その根拠を説明しなければならないのである。

(2) 中学数学

中学校で生徒会役員が「朝の１０分間あいさつ運動」を計画するにあたり、生徒の登校時間のアンケートから、実際に玄関に立つ時刻の設定を考える、という状況を設定する。

設問(1)

アンケート結果から登校時刻の範囲を求める。

設問(2)

アンケート結果を表したヒストグラムの特徴をもとに、ある時間帯に運動を行うのは適切でない理由を説明する。

設問(3)

生徒会役員の２人の提案のどちらかを選び、その提案が適切と考えられる理由を説明する。

数学という教科では、数学の世界で考察できるように抽象化・単純化することが多いが、大切なことはそれが我々の実際の生活にどのように結びついており、数学での考察・処理をどのように活用し意味づけできるかである。この問題では、資料（生徒の登校時間）を整理・処理し、更に考察する中から、実際の「朝の１０分間あいさつ運動」へ活用することを求めている。

特に設問(2)(3)では、単に値を求めるのではなく、資料を考察した結果（ヒストグラム）から自らの考えを導き出さねばならない。まさに数学を道具として実生活へフィードバックする思考であり、今後の授業で広く実践していただきたい内容である。

２　考察

例にあげた２つの問題は、教員に対しても生徒に対しても強いメッセージ性をもつと考えられる。授業において、それまでに身につけた知識を使って主体的に考え、他の生徒と協働して生き生きと学び合う言語活動の成果を試す問いになっているからである。そのような豊かな授業が行われている教室で学び、かつ積極的に参加している生徒であれば、戸惑うことなく、しっかりとした意見や考えを記述することができるであろう。現在、各学校では日々の授業において、各教員が自らの創意・工夫によって児童・生徒の思考力、判断力、表現力をはぐくむ授業実践に取り組んでいる。しかしながら一般的に児童・生徒が取り組んでいるテスト問題は、授業で学んだことをどれだけ正確に理解・記憶しているかを試すことが中心になりがちである。授業改善と並行して成績評価につながるテスト問題の改善が行われることによって、児童・生徒の「活用力」を更に伸ばしていくことが可能になっていくはずである。

そして、SASA で出題している「活用力問題」が、各学校において実施されているテスト問題の質の向上に大いに役立つものであると考える。

Ⅴ　SASA を活用した指導改善への提言

１　調査実施直後の活用

調査問題をもとにして作成された課題克服教材集を各学校で活用する。

基礎的・基本的な事項に関わる問題については、個々の児童・生徒ができなかった分野について、確実に復習し定着させるように授業で指導を行う。

「活用力問題」については、そのねらいを説明し、問いの要求を満たした解答を導くために、どのような力が必要かを理解させなければならない。そして類題にチャレンジさせることによって、活用力のアップを図る。ここで思い切って、その問題の学習を通して身につけた考え方を活用することによって対応可能な応用的・発展的な問題も扱うことは、成績上位の児童・生徒の学習意欲を高めることにもつながるであろう。

また、授業を担当している教員が実際に児童・生徒の解答を分析することで、それまでの授業の在り方について改善すべき事柄を考え、授業改善に生かす。一人ひとりの教科担当者が、自らのこれまでの授業について省察するだけでなく、学校全体で問題意識を共有し、指導改善に向けた具体的な議論を行い４月に作成する学力向上プランにも反映させる。

２　結果分析を踏まえて

(1)　速報データの活用

２月に各学校に、学級ごと、個人ごとの正答率データをお届けする。

この時点で、各学校において、県全体のデータとの比較により、学校、あるいは各学級の課題を正確に認識できる。弱点として明らかになった分野について、これまでの指導内容を省察し、課題克服のための指導改善のための具体策を考え実践していくことがそれ以後の児童・生徒の学力向上につながるであろう。

(2)　報告書の活用

３月に公開する報告書においては、本調査によって明らかになった課題となる分野について、きめ細かな誤答分析をもとにして、児童・生徒がどのような所でつまずくのか、その原因は何なのかを考察している。

そして、その課題を克服するために有効だと考えられる具体的な指導例を示している。そこにはそのまま授業で活用できるようなアイデアがたくさん盛り込まれており、授業改善に大いに役立つものを目指している。毎年、継続して公開されているこの指導事例の積み重ねを学校全体の財産とし、全教員が授業の進度に応じて参考資料として活用していくことが、福井県教員全体の授業力向上につながり、かつ児童・生徒の学習に対する興味・関心を大いに高めることにもなる。

(3)　教員自らが創意・工夫に満ちた「活用力問題」を作成

先にも述べたが、校内でのテスト問題の改善、ひいては入試問題の改善が、授業改善の成果を大きく左右することは間違いない。

SASA の「活用力問題」及び全国学力・学習状況調査の「活用」型問題の研究を積み重ねていくことで、一人ひとりの教員が、地域や児童・生徒の実態に即した「活用力問題」を作り上げる力量を養うことができる。児童・生徒が、日々の生活の中で高い興味・関心を持っていたり、悩んでいたりしている事柄を素材にする。授業での学びと密接につながるような問いを工夫する。そのような観点から練り上げられた問題は、児童・生徒にとって既成のテスト問題よりも、意欲的に取り組めるものになる可能性が高い。

≪引用文献≫

○教育再生実行会議(2013)『高等学校教育と大学教育との接続・大学入学者選抜の在り方について(第四次提言)』

≪参考文献≫

○代表　田中博之(2011)『全国学力・学習状況調査において比較的良好な結果を示した教育委員会・学校等における教育施策・教育指導等の特徴に関する調査研究』(平成 22 年度　文部科学省委託研究報告書)